

下西郷一本松遺跡

下西郷一本松遺跡の発掘調査は、平成 11 年 4 月から 9 月にかけて行われました。成果としては、弥生時代後期や古墳時代後期に属する 31 基の竪穴住居跡が発見されたことや、須恵器、耳環を埋葬した古墳時代終末の長方形の土坑墓が発見されたことなどです。貴重な成果がいくつもある中で弥生時代中期後半ごろの土坑墓を紹介します。

一本松遺跡では、地面に掘った坑（土坑）がいくつか発見されていますが、特に 9 号土坑に注目をしています。9 号土坑は、直径 120cm の円形の土坑で、弥生時代中期後半の甕形土器〔かめがたどき〕が埋められていました。復元された 3 点の甕形土器は、作り方や形に同じ特徴が見られ、特に甕の底に穴が開けられていることに注目をされます。うち 2 点は底部に穴が開けられ、1 点は底から穴を開けようとした痕跡が残されていました。

甕は本来は液体を貯蔵したり、食べ物の煮炊きに使われる道具ですから、底に穴が開いていれば器として役に立たなくなります。弥生時代や古墳時代の墓には底部に穴が開けられた土器が埋葬されることがよくあります。これは、死者が死後の世界で日常と同じ生活ができるようにという意味から、日ごろ使用していた器に穴を開け、死後の世界の器として死者とともに埋葬をしたものと考えられているのです。

岐阜市内では、弥生時代の墓としてよく知られているのは、首長の墓として中国製の銅鏡を副葬していた瑞龍寺山頂遺跡の特殊な土坑墓ですが、下西郷一本松遺跡の 9 号土坑は、死者のために穴が開けられた甕を副葬した弥生時代中期後半の一般的な庶民の墓の様子を明らかにしてくれたのです。

